



# 成熟示したタイ政治



渡辺 利夫

わたなべ・としお 拓殖大学長(開発経済学)。1939年生まれ。慶応大大学院博士課程修了。著書に『成長のアジア 停滞のアジア』『西太平洋の時代』など。

デモクラシーを民主主義と翻訳したのが誰かは知らないが、誤訳とはいえないまでも適訳ではない。民主主義<sup>デモクラシー</sup>は、求むべき価値や規範さらにはイデオロギ<sup>イデオロギ</sup>ーになってしまいかねない。実際民主主義を普遍的価値として捉える国があり、そう考える人々は日本でも少なくない。しかし守られるべきは社会の安寧と国民の財産であって、民主主義はそれを守るための政治的ルールもしくは手続きに他ならない。ならばデモクラシーは民主「制度」あるいは民主政体と訳されて然るべきであろう。決して価値ではない。

民主主義が価値ではなくルールや手続きであればこそ、民主主義は王政や君主制とも共存しうるのである。ルールと手続きは権力であり、王政や君主制は権威である。二つが微妙に織りなす政治システムが安寧と財産を守るための安定装置であるならば、これは一つの成熟した「国体」だということべきであろう。

今年に入って深い混乱をつづけてきたタイの政局が、最終的に「ミボン国王の「介入」によって収束したという事態を、タイの民主主義の未熟さを証す事件であるかのごとくに評する報道が目立ったが、未熟なのは報道の方である。

## アジアの民主主義

首相タクシン一族の利権疑惑や強権的なメディア対策などには確かに目に余るものがあり、これはいすれ可直の手に委ねられねばなるまい。しかし、高まる退陣要求に下院解散をもって応じたタクシン氏の手法は、議会制民主主義

のごくありふれた合法的な方法である。

総選挙の結果、タクシン氏率いる愛国党が過半数を制した。民主党など野党三党がとった手段は選挙ポイコットであり、街頭での抗議デモであり、退陣要求を声高に叫ぶのみ、まっとうな政策論争をもって応じることはなかった。総選挙ポイコットの結果、当選に要する20%の得票率が得られず再選挙となった選挙区が生まれ、首都バンコクなどでは不信任の白票が与党得票率を上回ったのであるから、多くのマスコミが選挙の「正当

性」に疑問を提起したのも無理からぬ。

しかし野党のポイコットが合法なら、首相の議会解散も合法である。タクシン氏の政界からの「永久追放」をまで要求して力による抗議行動を繰り返すのは、合法とはいえず正当とはいえない。

ここで国民の敬愛を一身に集める「ミボン国王」が流血の危険性を察知しタクシン氏を諭して辞任を促したのは英断であり、タイ政治の成熟をその中に読み取っているであろう。最大の権力集団である国軍が今回の混乱の中で毅然と中立を守

ったこともタイ政治の成熟の一面を垣間みさせたかに見える。

一九九二年五月、国王は流血事件の収束を求めてスチンダ首相(当時)と首相退陣を要求する急先鋒チャムロン道義党党首(当時)を王宮に呼び、その場で一氣に事を取めた。英明な権威のありようがどこで思い起こされる。

アメリカの統治下、種族社会が民主主義の青丘を脅せられた社会がフィリピンである。いかにも絵に描いたような民主主義をアジアで最も長期にわたり継承してきたものの、同国では昨年だけでもクーデターが二〇回以上も流れるほどの政治的不安定性がつづいている。

この二月、軍の准将や海兵隊大佐によるクーデター計画発覚を受けて非常事態宣言が出され、野党政治家やマスコミを含む関係者が相次いで拘束された。真偽定かならぬアロヨ大統領暗殺計画が噂として飛び交いさえた。非常事態宣言は解除されたが、軍部の動向や「ヒープルスパワ」がどこに向かうのかまだ不透明である。

タイとフィリピンのいすれをみても、民主主義それ自体が普遍的価値をもつなどとは到底いえない。かといって私が民主主義に否定的である由もない。しかし、せめてもチャーチルがかつて語ったという、「デモクラシーは人間の知性が考案した最悪の制度だ。ただし他のすべての制度を除いての話だ」といった認識だけは共有したいものだと思う。

